# 剣法一羽流

池波正太郎

剣法一羽流
池波正太郎
© Toyoko Ikenami 1993

1993年5月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01
電話 出版部 (03) 5395-3510
販売部 (03) 5395-3626
製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義
製版——豊国印刷株式会社
印刷——凸版印刷株式会社
製本——加藤製本株式会社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。 (庫)

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

講談社文庫

# 剣法一羽流

池波正太郎

講談社

目次

そろばん虎之助　七
闇討ち十五郎　七三
冬の青空　一一七
小泉忠男の手　一五七
土俵の人　一八三
仇討ち街道　二二三
剣法一羽流　二六五
時代小説の特質　池波正太郎の場合　尾崎秀樹　三一〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

# 剣法一羽流（いっぱりゅう）

そろばん虎之助

## 算勘名人

土屋虎之助は、家中の侍たちから〔そろばん虎之助〕の異名をもらっている。
この呼び名には、家中のものの羨望か、または軽蔑か、狂おしいばかりの嫉妬がこめられている。
それもこれも、藩の政治を一手につかみとり、権勢をほこる家老・安達隼人正が目に入れてもいたくないほど、虎之助を可愛がっているからだ。
だから、面と向かって虎之助を〔そろばん〕呼ばわりするものはないと言ってよい。
もっとも、つい一と月ほど前に、こんなこともあった。
その日も、土屋虎之助は下役三人ほどを指図しながら、二の丸和倉門わきの一棟内にある用部屋で、例のごとく経理に没頭していた。
そこへ服部助九郎が入って来た。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

助九郎は藩内随一の硬骨漢だと評判をとっている。剣術も大したものだ。
「おい!!　そろばん侍」
こう呼ばわり、助九郎が虎之助の執務している机の前へ、つかつかと進んだ。
あざやかな指さばきで算盤をはじいていた虎之助は、にこりと人なつこい微笑をもって助九郎を見上げた。
筋骨たくましい肩をゆすり、助九郎は吼えるように叫んだ。
「今日こそは、撲りとばしてくれる」
「これは乱暴な……」
「一年も前から撲りたいと思うていた」
「それは、ずいぶんと我慢をなされたものだ」
虎之助も、力が弱いくせに口だけはへらない。
「何イ!!」
助九郎のあばただらけの四角な顔に血がのぼって、どすぐろくなった。
「この犬め!!　お家に仇なす犬侍め」
服部助九郎の鉄拳が飛んだ。
虎之助は両足をはねあげ、後ろざまに一間も撲り飛ばされた。どうやら失心したらしい。
「何だ、そのざまは――立て!!　武士ならば立って抜けい」
下役の侍どもは蒼白となって、こちらを見つめている。こんな乱暴を働けば、安達隼人正がど

んなに激怒するか……。
「見たか!!」と、助九郎は下役どもを睨めまわし、
「おのれらも安達隼人正の飼犬であろう。このありさまを、あの悪家老へつぶさに伝えおけい」
かっと虎之助に唾を吐きつけ、助九郎は用部屋を去った。
この事件が、家中のみか、城下町一帯へまでひろまるのに、あまり手間暇はかからなかった。
安達隼人正が虎之助を呼びつけた。
「それで、おぬしは黙っておったのか？」
「どちらにしろ、勝味はございませんので……」と、虎之助は頭をかいた。
隼人正は、五十歳の脂がこってりとのった肉づきゆたかな顔貌に苦笑をうかべ、
「おぬしがのぞむなら、助九郎めに腹を切らせてもよいぞ。それとも閉門にでもしてくれようか？　どうじゃ」
「別に……」
「口惜しくはないのか？」
「別に……」
虎之助は、左半面が青ぐろく腫れあがった顔をしかめ、
「力ずくでこられては、私、どうにもなりませぬ。算盤で争うのなれば退けはとりませぬが……」
隼人正が笑い出した。

「よいわ。おぬしがそう申すのなら、捨てておこう。ふ、ふ、ふ……それにしても、おぬしの名は強そうな名前だなあ」
「おそれいります」
「武芸は全く駄目なおぬしだが、算勘の道については名人じゃものな。武士というものには二つの種別がある。武道と経済、これじゃ。そのどちらが大切かは、すでに戦国の世が夢物語となった今の世では、明白なことであろう」
「いかにも……」
嬉しげに、得意げに、虎之助が相槌をうつ。
「わが筒井家に、土屋虎之助のごとき算勘の達人あることを、家老のわしは誇りに思うておる」
虎之助は、しきりに頭をかき、恐縮の体であった。
酒の仕度が運ばれてきた。
侍女たちの後から、隼人正の妹の久江が入って来た。
久江は出戻りである。年齢も、虎之助より一つ上の三十歳になるのだが〔鯉こく〕の味を舌に想い起こさせるほどの女盛りが、まだまだ肢体にみなぎっていた。
五年前に妻を亡くし、二年前に一人息子を亡くした隼人正の家の内のことは、万事、久江が切りまわしている。
久江が、すっと虎之助の前へ来た。
「土屋様」

「はあ？」
「何というぶざまな――城下の町人どもまでが噂しておりますのに……」
言い捨てると、さっと部屋を出て行ってしまった。
隼人正は侍女たちを退らせ、虎之助と差し向かいで酒を飲みはじめた。
「妹め、おぬしが助九郎に打たれたことが、よほど口惜しいとみえるな」
「何も、そのようなことは……」
「いや、そうじゃ。兄のわしが目をかけているおぬしだからいうばかりではない。妹は、おぬしに惚れておるらしい」
「とんでもない、そのような……」
「迷惑かな？」
「いや、何も、その……」
「どうじゃな、もろうてくれぬか？」
「……」
「よいわ、押しつけようとは言わぬ」
「は――」
「あれはなあ、十八のときに、江戸家老の玉木惣右衛門の口ききで、越前の或る家中のものへ嫁にやったのだが……そのころは、わしもまだ殿様の御近習づとめ、禄高も……そうじゃ、今のおぬしと同じ百石。おまけに、亡父が残した借金も片づかぬときでな。いや内所は苦しかったもの

よ……でな、妹もよいところへはやれずに、久江が嫁いだのは、五十石そこそこの家であったわ」

「なれど、何故にお戻りなさいましたので？」

「亭主めが温和しすぎてうだつの上がらぬ男ゆえ、もう厭だと申してな。たしか七年前のことだ。妹め、たった一人で、さっさと帰って来てしもうたのだ。いやはや後始末に一汗かいたが、さいわい子供も生まれなんだので、反って相手方もホッとしたようであった。何しろ、あの通りのきかぬ気の女ゆえ。亭主どのも閉口しておったらしい」

また侍女たちが料理をもって、あらわれた。

「や!! これはまた、大変な御馳走で……」

などと虎之助は、無邪気によろこび、いそいそと酒盃をとる。

酔うと隼人正は、しきりに「虎よ、虎よ」を連発した。

少年のころからの虎之助を目にかけ、その才能を大きく買って、二十石三人扶持の下級藩士から、現在の〔勝手元取締頭取〕という要職にまで引き上げてやったという、よろこびと愛情があるからなのであろう。

他の藩士たちが虎之助をうらやむのも無理がないところだ。

こうして個人的に、妹の久江や土屋虎之助に対しているときの安達隼人正は温かい人柄を感じさせるし、自分を憎み虎之助にも暴力を加えた服部助九郎なぞ眼中におかぬところなど、肚の大きい人物にも見えるが、しかし公的に見た隼人正は、一国の執政として、すでに堕落の谷間へ、

ふかく落ちこんでいたのである。
土屋虎之助は、そのことをよくわきまえていた。いながらも、彼は隼人正の悪政の一端を肩に担っているようなものであった。

## 権臣の座

「太夫も、御子息を亡くしてから、おさびしいのでしょうな」と、これは虎之助が隼人正に言っているのではない。
久江の、豊満な裸身を抱きしめつつ、彼女に言っているのである。
「兄上は、虎さまと私を夫婦にして、自分の養子にしたい気持らしく思われます」と、これは久江である。
「え――？」
「いいえ、無理にとは申しませんよ、きっと――でも、私、きっと、虎さまが私を妻にしたいとおっしゃるように、してみせますもの」
「むむ……」
ところは、藤野川を少しさかのぼった丘のふもとに古くからあって、料亭と旅籠を兼ねている

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton